
妖操師!!!

甲崎雄人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖操師！！！！

【Nコード】

N6839C

【作者名】

甲崎雄人

【あらすじ】

妖操師・・・・・・・・それはいつかの時代どこかの場所で妖怪や物の怪達と闘い、倒すことを生業とした者達妖操師をめざす少年、大空雷毅ケンカは強いが妖術はダメそんな雷毅がどういう風に成長しそして、妖怪や物の怪達に立ち向かっていくのか・・・冒険と妖術のアクションファンタジー

プロローグ

プロローグ

ドン

「くっ」

オレは今化け物と対峙していた。

それもオレの身長の二倍も三倍もあるとてつもなく大きな化け物。

一つ一つの攻撃が少しずつだが確実にオレの体力を奪っていく。

(なかなかやってくれぬぜ。だが……)

「オレもここで終わってらんねえんだよ！ 行くぜ、抜天召雷イ！
！」

俺が叫んだ瞬間、黒雲が天を覆い、雷鳴とともにすさまじい稲妻が化け物に降り注ぐ

……ハズだったのだが。

パチッパチパチッ

実際に出たのセーターにでも溜められるような電気。

「あ、あれ？」

「九番失格！」

俺の名前は大空雷毅。

そんでもって、ここは妖英学園の校庭。

妖英学園とは妖怪とか妖術とか操りまくって英雄とかになっちゃうまおうぜ学園の略だ。

ウソだ。

本当は学園を建てた初代校長が妖英とかいうヘンテコな名前の持ち主であった、

唯それだけだ。

何をする学園かというと、妖操師の育成である。

妖操師とは、妖怪や妖術を操り、その力で妖怪や物の怪と戦い、倒すことを

生業としている者たちのことである。

当然そこに通っている俺たちは、妖操師を目指している。

さて、話を元に戻すと今日は学園の実技試験の日。

試験内容は、名前のとおり何にでも化けることができるこの化け狸を倒すというものだ。

ただし、C級以上の妖術で。

妖術は通常、A級、B級、C級、D級の四段階に分けられており、オレはハッキリ言ってケンカは強いがD級の妖術もあまり使えない。俺たち妖操師を目指すものとしては妖術を使えないというのはかなり致命的である。

そんなこんなでさっきの場面である。

「先生エー。もう一度、もう一度だけチャンスを。」

「はい。次イ。十番の奴出て来い。」

「うわあ。ヒデエ。話すら聞いてないよ、この人。こういう奴がいるから教員職がああだ、こうだ言われるんだな。うん」

「黙って、出てけ。次の試験の邪魔」

オレが教員たる者、生徒にああいう態度で臨んでいいのか、などと考えながら歩いていると、

「何が『オレもここで終わってらんねえんだよ』よ、また不合格になっちゃって」

誰だ。このオレ様にそんな口を利いているのは。

幼馴染の陸名小雪だった。

「フンだ。どうせダメでい。テメエはどうなんだよ。」

「あたしは余裕よ、余裕。」

忘れていた。小雪の成績は結構いい。B級の妖術もちょっと位なら使いこなせる。

「でも、雷毅。もうそろそろまともに術を使えるようにならないと。卒業試験までそう何日も無いよ？落第しちゃうよ？」

グサツグサツ

音を立てて言葉のトゲが突き刺さる。

「み、見ときやがれ！！ 卒業までにもものすごいA級以上の術をばっちりマスターしてきてやるぜ」

小物の悪役みたいな捨て台詞と共にオレは駆け逃げていった。

「卒業のときだったら、落第しちゃうてるゾ 　　って聞こえてるかな」

第一章 くも？雲？……蜘蛛！！！！

第一章

くも？雲？……蜘蛛！！！！

「アゝ、クソツ！　なんで出来ねえ？」

今オレがいるのは、森の中。

大森林って感じじゃなくてただの森。

田舎とかに行ったら

「森？　ああ、うちの裏にあるよ」

って言っただけで簡単に出てきそうな森だ。

現に俺んちの近くにあるしな。

なんでそんな所にいるのかって？

それは前に小雪にA級の妖術マスターしてくるぜ、って言っちゃたからな。

俺は、約束は守る男だしな。

それで冒頭のアレである。

なかなか出来ないんだよね、A級妖術。

「なんで、A級妖術くらいでこつてもこずるかな。まあ、A級って言ったら最高クラスなんだけどな」

だが、実際、A級妖術といってもピンきりだ。

伝説の勇者にもなれるような最強の術もあれば、ちょっと場数を踏めば結構使えちゃったりする術もないこともない。

まあ、一つや二つしかないだろうが。

「石群瞬来！」

この術はあたりにある何百とある石を操り、相手にぶつける術なのだが

「だあああ。なんでひとつも動かねえ!?　こんにやる」

いらいらしてきたオレは力任せに目の前の石を蹴飛ばしてみた。

ヒュ　　ゴツ　　グワツ

運悪く木々に当たらず森を越え出て人に当たってしまったらしい。
当たっちゃた人、ごめんな、と頭の中で謝っていると、

「おい!　誰だ!?　俺に石を当てやがったのは?」

ヤベツ、わざわざ探しに来たらしい。

そんなに痛かったのか?

そこまで強く蹴ったつもりは無かったけどな。

「お前か?　俺に石を当てたのは?」

そうこうしてるうちに来てしまった。

つて、アレ?　こいつ、現校長の息子の梁西宗慈じゃないか。

梁西宗慈はオレより歳が二つほど下で現校長の息子とだけあって、
成績もいいほうだ。

つまり、少なくともオレよりは妖術を使えるってことだ。

「すまん、すまん。石を蹴ったら結構飛んじまって」

「すまんで済むかよ。土下座しろよ。親父とケンカしてこっちは機嫌が悪いんだ」

なかなか生意気なガキだ。俺が悪いとはいえ、土下座しろとまで言われたらさすがに頭にくる。それに半分、八つ当たりだな。

「土下座だあ?　こっちが悪いとはいえそこまでのことした覚えねえぞ」

ボソボソ

「ん?　なんだ?」

ボワア

「アチツチツ」

俺のそばにあった木が火を噴いた。どうやらあいつの妖術のようだ。

「早く土下座しないと黒焦げにする」

「調子に乗ってんなよ、コラ」

バキッ

殴っちまった。一応、俺が悪いのにな。
でもあんまり生意気なことを言ってるから、つい、な。
五割も出してないから命に別状は無いと思うが。
おお、よかった。そこまでひ弱じゃなかったようだ。
数秒たってからやっと起きだした。

と、思ったら

ボソボソ

「ヤベツ」

ボワア

間一髪のところまで避けた。

やれやれ、石を蹴っただけでここまで発展するとは。
世の中、何が起こるかかわかったもんじゃないな。
オレもアイツもちよつとカルシウム不足かな？

あの炎の術は、狙いを定めて撃つ一般的なタイプの術のようだ。
そう考えオレは森の中に逃げ込んだ。

アー、ウン。

冒頭のアレは訂正することにしよう。

この森、結構深いみたいです、ハイ。

「ア、くそ。今日はついてねえな、オイ」

前に進めば、森の奥へと進んじまって出てこれなくなりそうだし、
後ろは後ろで所々炎が燃え盛っちゃてるし。

「隙でもついてまた石でも蹴りつけるかな？」

と、考えてるとそこにちょうどいい洞窟が。

「洞窟か。もうそんなモンがあるようなところまで来ちゃったか。
ま、ちょうどいいあそこで待ち伏せでもすつか」

フム、この洞窟、結構深いみたいだ。

天井も結構高くて3、4メートルくらいか？ 横もそれくらいだ。入り口の隅には人が一人くらい隠れられる大きさの岩もある。待ち伏せするにはそこがよさそうだ。

そんなこんな考えていたら、

「テメー、逃げるな！」

おわっ、見つかっちゃった。

今日は、ボーっとしすぎだな。

待ち伏せ作戦、決行前に失敗！

「火突瞬撃！！」

火の矢がオレに向かって飛んできた。

妖術は元々、対妖怪用の攻撃だ。それが人間に当たったら無傷で済むはずが無い。

俺がヤバイ、避けきれねえと思ったそのとき、

「おぎゃ！」

コケた。石につまずいて。

まさに不幸中の幸い？ 火の矢はオレに当たらず洞穴の奥へ。

ゴオオオオオオ！！

なんだ、なんだ？

攻撃で壁が崩れたって感じの音じゃねえぞこりゃ。

もしかして………

ドスン、ドスン、ドズーン

やはり、妖怪！

「あれは土蜘蛛！ しかも、デカイ！」

お前のせいだろ。何、冷静に分析してくれてんだ？ コラ。

大体2メートルくらいの大きさだ。普通は1メートルくらいなんだが。

つくづく、ツイてねえ。最悪だ。

つと、オレもこんなこと考えてる場合じゃねえな。逃げねえとやばい。

オレは、とりあえず洞窟の外へ逃げ出した。

「おい、宗慈。とりあえず勝負はお預けだ。さっさと逃げるぞ」

「何、言ってるんだ？ 逃げる？ とんでもないね。あのくらいオレが倒してやる」

とか言ってる奴は土蜘蛛に突っ込んでいきやがった。

「あの馬鹿！」

どうする？

妖術を使えないオレが行ってもやられるだけ。やっぱり助けを呼びに行くべきか？

「チイツ、ツイてねえ」

俺はそこらにある大きめの岩を掴み、土蜘蛛のところへ駆け出した。

宗慈と土蜘蛛は、洞窟の脇で戦っていた。

やはり、土蜘蛛の力の方が圧倒的に上のようだ。

「やっぱ、助けを呼びに行った方がよかったかな？」

なんせ、雑魚に雑魚が加勢したって雑魚でしかないからな。

「オーイ、土蜘蛛、こっちだよつと」

ちよつと離れたところから岩を投げた。土蜘蛛を挟んで宗慈と正反対のところだ。

よし、こっちを向いた。後はこっちに気を取られてる隙に後ろから強力な術を……

「オイ、馬鹿。術も使えないお前が何してるんだ？」

「つて、なんでテメーがここにいる？ こういうときは囷に気を取られてる隙に相手をたたくのがセオリーだろうがッ」

「ンなもん、知るかよ」

こいつがここまで馬鹿だったとは、予想外だ。

ブオ ドツカーン

突然の土蜘蛛の攻撃。俺たちは吹き飛ばされた。

く、くそ、二人まとめて攻撃食らっちゃった。アバラが何本か逝っ

たな、こりや。

「あの馬鹿は大丈夫か？」

うーんと、いた。

ありや、気を失ってやがる。アイツ背負って逃げ切れるかが問題だな。

オレが宗慈に近づくと、

ブォ ドーン

「ガハッ」

後ろからの攻撃。

く、くそ、甘かった。土蜘蛛の奴が目に入らない時点でもっと警戒しとくべきだった。

それに、

後一発、持つか持たないかって感じなんだよな。

さすがに、ちとヤベエな、コリヤ。

ギャ ス

なんだ、今頃になって宗慈との戦いのダメージが？

意外にアイツ、強かったのか？

違った。増援を呼んだようだ。

ズズン、ズズン、ドシーン

オイオイ、マジかよ、絶望的だな。一匹じゃなく、二匹も土蜘蛛が増えるなんて。

アー、ヤベエ。ダメージのせいかな、フラフラしてきやがった。

バチバチ

「イテッ」

なんだ？ 左手の痣のところがしびれてきやがった。

つて、なんか放電し始めたぜ。オイ。

まあ、いいや。

力もみなぎってきた。気分もいい。

これくらい力があつたら土蜘蛛もいけるかも。

俺は土蜘蛛に向かって走り出した。

なぜか、身体も軽い。

オレは土蜘蛛の頭の真上に飛び乗った。

「まず、一匹目」

バチツバチチチツ

電撃が迸る。それは、土蜘蛛の全身を回り、奴を焼き上げた。

「土蜘蛛の丸焼き、いっちょあがりっ」と

思ってた以上だな、こりゃ。

触っただけで焼き殺せたし、身体能力もとてつもなく上がっている。

ブオオオ

「あわわっ」と

上からの攻撃。仲間の上に乗ってるのに容赦が無い。

ま、死体だけどな。

タンツ

俺は二匹目の土蜘蛛の攻撃をジャンプでかわし、その足に飛び乗った。

「二匹目」

バチチチチツ

よし、いける。

次だ。

ドーン、ドーン、ドーン

オレは攻撃をかわしつつ、三匹目の土蜘蛛へと近づいた。

土蜘蛛の目の前。攻撃。

俺が飛んでかわす。

「これで終わりだな、あーばよっ」と

土蜘蛛の頭を飛び越えざまに触った。

バチチチツチツ

「三匹目」

ドッザーン

最後の一匹を倒した。何とか、勝てたようだ。

「アー、終わったあ」

俺はそれ以降の記憶が無い。

話によると、宗慈と森の近くで倒れていたらしい。

そのまま俺たちは人に発見されて、病院に連れてかれた。起きてから見たのが、怒った小雪の顔。

先に起きた宗慈から話を聞いたらしい。

貧血気味なのに、こっぴどくしかられた。

「もう、妖術もろくに使えないのに。今回はたまたま、使えたからよかったけど。無茶しないでよ。まったく」
だとさ。

宗慈のせいで無茶することになったのにな。

まあ、オレ的には変な術(？)も使えるようになったし、プラス、マイナスで言うとプラスかな、と思うのだが………

第二章 たとえ、火の中、水の中……つて熱ッ！

第二章

たとえ、火の中、水の中……つて熱ッ！

「見た？見た？ 今日の演習。すごい術使ったんだけど」

「うーん、昨日、夜更かししちゃったんだよね。だから、自分ので精一杯だったんだ」

「ナ、何イ！？」

学園からの帰り道、オレは幼馴染の小雪と歩いていた。

小雪とは家も近い。

だから、必然的に同じ帰り道となる。

そこで、オレはこの前の土蜘蛛の戦いで身につけた術を今日の演習で披露したのだが、肝心の小雪が見ていなかったらしい。

「オイオイ、おまえがA級妖術をマスターしてこいって言ったんだろ」

「雷毅が自分で宣言したんでしょ。それにその術って本当にA級妖術なの？」

そうだった。

すごい術が使えたから自分で勝手にA級妖術だと思い込んでいたが、あの術のランクどころか、名前すらわかってないんだった。

「どうなの？」

「たぶん、A級妖術……かな？」

「何？ その微妙な間は。わからないんでしょ」

ハイ、そうです。わかりません。

「もう、しょうがないな。じゃあ、術名は？ あたしが調べてきてあげるから」

どこだ、どこだ、どこだ！

オレは走っていた。

さつきは小雪を落ち着かせるために冷静な感じを装っていたが実際は結構あせっていた。

この前に土蜘蛛と戦った時とは違い、連れ去られた子供は妖術も使えないし、体力も劣っている。

状況は圧倒的にヤバイ。

「妖怪の寝床はどこだア〜！」

妖怪というものは大体、オレたちと少し離れたところに住んでいる。山や川の底、この前の土蜘蛛みたいに森に住んでいるものもいる。要するに自然が他より多いところだな。

だからそういうところを探し出せばいいわけなのだが………
「あつた」

竹藪だ。大きさも妖怪が住むにはちょうど良いくらいの大きさだ。ここに違いない。というか、違っていたら終わり、だ。

とりあえず、入らなければ始まらない。

オレは竹藪の中に入っていった。

捜し始めると連れて行かれた子供の名前がわからないので、なんとか呼びながら探せばいいのか困ってしまった。

とりあえず、オーイと叫びながら探すことにした。

「オーイ、誰がいるか？」

とりあえず、ネズミの化け物というからには、ネズミのような姿をしていて、かつ、子供を一人くらいは運べる大きさなのか。

ということは、結構大きいな。ある程度開けた場所にいるはずだ。そういうところならこのくらいの竹藪だ。

すぐ見つかる………といいが。

うわーん、うわーん

どこからか泣き声がする。

男の子の声だ。

まだ殺されてはいないらしい。

オレは泣き声がするほうへと向かった。

やはり、ある程度開けた場所だった。

人百人くらいならゆうには入れる。

そして、その広場の中央に竹で作った巣の中に座っていたのは、

「あれは^{かえんてうそ}火炎鉄鼠！」

火炎鉄鼠はその名のとおり炎を纏った化けネズミだ。

体長は2メートルくらいで体重は200キロはある。

そのくせすばしっこく、炎を纏っているため近づくことすらできない。

子供が燃えてしまわなかったのは小さいし、口に啜えられていたからだろう。

火炎鉄鼠の口の周りには食べ物や啜えたときに獲物が燃え尽きてしまわないように炎を纏っていないのだ。

でも、今は子供を口に啜えていないようだ。

それにさつきから頭をしきりに動かしている。

何かを探しているようだ。

「うわーん、うわーん」

子供が走って逃げ回っている。

なかなか、やるな。

オレは子供に駆け寄った。

「オイ、大丈夫か？」

「うわーん、うわーん」

泣いてはいるが外傷は無いようだ。

「俺が来たからもう大丈夫だ。帰るぞ」

わざわざ妖怪と戦う必要も無い。

オレは火炎鉄鼠に気づかれないうちに子供をつれて竹藪の中に隠れようとした。

グウオオオオオオオ

「チィ、気づかれちゃった」

オレは子供を抱き上げ、走り出した。

あと少しで竹藪の中に隠れられると思ったその時！

ズドーン

「くそ、間に合わなかったか」

「うわーん、うわーん」

火炎鉄鼠がオレ達の目の前にたちふさがった。

この子がいると戦いづらい。

どうやって逃がそうか。

(しょうがねえ、オレが困に)

オレはそう考え、足元にある小石を拾った。

「おい、坊主。オレが今からアイツの気を引く。その間に逃げろ」

「う、うん」

「よし、それでこそ男だ」

オレはそういつつ走り出した。

火炎鉄鼠はいきなり動いたオレの方に気を取られたようだ。

「喰らえッ」

オレは火炎鉄鼠の顔に向かって石を投げた。

石は奴の右目へ。

ギヤアアアアアア

ヤツは右目を負傷したらしい。

予想外の収穫だ。

あの子もちゃんと逃げたらしい。

ボワワアア

「うわっ、アチチチッ」

火炎鉄鼠の纏う炎が大きくなった。

怒らせてしまったらしい。

「まずい。距離を取らねえと」

ブオオオオオ

右から風の音。

オレは吹き飛ばされた。

「予想以上にキレちまってるらしい」

しかし、一撃で火傷と爪による切り傷がついてしまうのは厄介だ。

まあ、火傷のおかげで出血多量で死んでしまうことはなさそうだが。

ブオオオオオ

二撃目。

真上からの前足による攻撃。

ドゴーン

オレはぎりぎりでかわした。

切り傷はつかなかったが火傷を負ってしまった。

「もつと余裕を持ってかわさねえと」

それにしてもあの炎は厄介だ。

炎のせいで触れて電撃を流すということもできない。

そんなことを考えていると

「雷毅！！」

小雪だ。

「お前、妖操師を呼んでこいって言っただろうがッ」

「途中で会った友達に頼んできた」

「じゃあ、帰れ！」

「あんたよりは妖術使えるから大丈夫」

ブオオオオオ

「チッ」

オレは小雪を突き飛ばした。

ガスッ

チィ、まともに喰らっちゃった。

「だから、言ったんだ。お前がいるとオレはお前をかばわないとい

けない。お前はその妖術で逃げることだけを考える！」

「で、でも………」

「早く!!」

「わかった」

あーあ、あいつのせいでいらない攻撃食らっちゃった。ま、なんとかなるだろ。

オレが怪我の具合を確かめていると、

「キヤア」

ヤバイ、アイツ小雪のところ行きやがった。

オレが駆け出す。

くそ、間に合わない。

どうする!?

「土岩防壁!!」

岩の壁が突如出てきた。

ガキキキキッ

「もう雷毅に迷惑はかけない。自分の身は自分で守る」

何とか防げたようだ。

ピキッピキキッ

クソッ! アイツ、壁を砕くつもりだ!

どうする? どうする? どうする?

「だああああ! イライラする。と・り・あ・え・ず、吹き飛ば!!」

オレの中で何かがぶちつと音をたてて切れた。

俺の手から大量の電撃が放出された。

バリッバリバリバリッ

ドカーン ギャーオ

火炎鉄鼠が吹き飛んだ。

この術は電撃を放出することもできるようだ。

イライラしていたので、吹き飛ばんじまえと、思ったから言っただけなのだが、本当に吹っ飛んでくれたようだ。

「オラア! 小雪イ! さっさと行きやがれ!」

「ご、ゴメン。ありがとう」
さてと

「火炎鉄鼠！テメエはオレを怒らしちまったようだな！」
グウオオオオ ビュオツ

火炎鉄鼠が前足を振り下ろす。

「うおつと」

俺が後ろ斜め上に飛んで交わす。

人のせりふを途中で止めやがって！もう許さねえ！
まあ、もともと許すつもりはさらさらねえケドな。

「轟け、雷鳴！ 奔れ、稲妻！ 消えろ、百雷無塵！！」

百もの雷撃が迸る。

バリツバリツバリツバシシッ

スタツ

オレが地面に降り立つ。

「キマったぜ」

火炎鉄鼠は文字どおり、塵も残さず消えさつ………灰が残っ
ちやっただかも。

つて、ヤベツ、くらくらししてきた……カ……モ

ドサツ

俺はまた倒れることになってしまった。

俺はその後、遅れて来た妖操師に発見された。

そしてやつぱり病院へ。

今回目覚めた時は妖操師に怒られてしまった。

あまり、無茶しないように、だと。

お前らが来るのが遅かったせいだろうがっつと、心の中でかるくキレ
た。

おっと誰かが病室をノックしている。

「ドーン」

ガチャ

「小雪か」

「ごめんね、あたしのせいで怪我させちゃって」

「いや、別にいいけど」

ま、もともと結構怪我していたしな。

「それとね、今回であたしは実戦ではダメだっつてわかったのだから？」

「だから、あたしももっともっと修行することにしたの！」
ま、まさか

「それで、あたしも雷毅と一緒に今度から一緒に修行するから」

「オレはやりたくないんだけど」

「はい、これ、明日からの修行のスケジュールね」

「だから、やりたくないんだけど」

「よっし！明日からがんばるぞ！」

ドタドタドタ、バタン

小雪は騒がしく病室を出て行った。

なんか、勝手に決めちゃったなあ。

っていうか、なんで明日退院って知ってたんだよ。
オレはため息をついた。

第三章 晴れ、のち時々南瓜（カボチャ）

第三章

晴れ、のち時々南瓜^{カボチャ}

今日は妖英学園の卒業試験の日だ。

今日の試験で来年も学園で過ごすか、日々妖怪たちと戦うか、そのどちらになるかが決まるのだ。

「うーむ、なかなか緊張してきたな」

手を擦りながら、学園に向かい歩いていると、

「おはよう！雷毅！」

「あ？ああ、小雪か。機嫌よさそうだな」

ニコニコしながら小雪が近づいてくる

「うん！だって今日の試験で来年から妖操師として活動できるからきないかが決まるんだよ？わくわくするじゃん」

「ハア。お前は気楽でいいな」

「雷毅だつてあの術A級だったから大丈夫でしょ？」

オレが口を開こうとした。

ドン

「おわっ」

誰かが勢いよくオレにぶつかった。

「いててて」

「大丈夫かい？」

黒い服を着た男がオレに手を差し出していた。

「お、おう」

オレは自力で立ち上がった。

「すまなかつたな」

そついいながら黒服の男は足早に立ち去った。

やれやれ、何をあんなに急いでいるのやら。

「アレ？あの人、何か落としていったよ」

「あ？」

オレの足元に紙切れが落ちていた。

表には何かの文字が書かれていて、裏を触るとベタベタするところとかサカサするところがある。

「何、これ？お札？」

「ああ、剥がしたのも最近らしいな」

「届けたほうがいいかな？」

「使った後みたいだからいいだろ」

オレはポイ捨てをしない主義だ。

お札を丸めてポケットにつっこんだ。

「時間喰ったな。走るか！」

「あ、ちよつと待つてよ」

俺は小雪をおいて走り出した。

オレは学校に着いた後教室にかばんを置き、試験会場へ。

「あゝ、緊張してきた」

今朝の一件で緊張を忘れていたが、緊張が戻ってきてしまったようだ。

「へへ、お前みたいなのでも緊張するんだ」

「ケツ、てめえなんて顔真つ青じゃねえか」

級友と一緒に文句を言い合っていると緊張もほぐれてきた。いいかんじだ。

オレは試験会場の説明を受けるため、講堂へ入っていった。

来てみると他の奴等は結構早くから来ていたみたいで、用意されているパイプ椅子はほとんど埋まっていた。

っていうか、全員の椅子を用意しろよ。

「おーい、雷毅！こつち、こつち！」

小雪だ。

どうやら、俺の席をとっていきたくらいらしい。

オレにとつては、ありがたいが、あいつには一緒に座ってくれる友達がいらないのだろうか？

小雪の隣に座るからといって俺に友達がいらないという訳ではないからな。

「私より先に校舎の中に入っていったくせに何で私より遅いのよ」

「しらねえよ。別にまだ始まっていないからいいだろ」

「まあ、そうだけど」

「ほら、ブツブツ言っているうちに始まるぞ」

「ぶつぶつってほど言っていないじゃない」

「わーたよ。ほら、始まるぞ」

校長が前の舞台の袖から出てくる。

ぴたつとざわめきがやんだ。

「えー、これより第37回卒業試験を始めます。第一試験担当の山岸先生こちらへ」

舞台の袖からもう一人若い先生が出てきた。

つて、アレ？

あの人は朝の黒服の男じゃないか！

あの人、先生だったんだ。どおりであんな札を持っていたんだ。

「えーと、それでは第一試験の説明に入りたいと思います。まずは・
・・・」

ズズズズズズズズ

ん、何の音だろう？ 下のほうから聞こえるようだ。

音の根源を探るためにキョロキョロと辺りを見回すと、ほかにも数人同じような行動をしている生徒がいた。

先生たちもいつの間にか話をやめている。

「どうしたのかな？」

不安げな顔で小雪が聞いてくる。

「ちいと、だまつてる」

ズズズズズズズズ

気のせいだといいいのだが音がどんどん近づいてくるような気がする。残念ながら、地面が振動してきている。気のせいではなさそうだ。音が近づいてきても相も変わらず下から音が聞こえてくる。

(ということは、

ズズツ……

音が止まる。

「逃げる、小雪」

「え？」

「早く！」

「う、うん」

小雪が2、3メートル離れる。

ズツドーン

真下に何かがいるってことだ！)

何かが俺たちがさっきいたところから飛び出してきた。

「きゃー」

「また妖怪か!？」

蔓だ。

さっき飛び出してきたのは蔓のようだ。

「つ、蔓？」

何故に、蔓？

こうしている間にも蔓はどんどん伸びていく。

「この蔓は千猫南瓜せんびょうかほちや!!」

今まで舞台に突っ立っていた山岸先生がやっと反応した。

ほかの先生たちはすでに避難の誘導を始めている。

グググッ

蔓が弓なりに反れる。

「やべッ」

俺はパイプ椅子を三脚持って走り出した。

蔓が振り下ろされる。

ベキッ

腕に衝撃が来る。

「くっ」

パイプ椅子が三脚とも折れる。

どんな力をしているんだ、蔓なのに。

ポフッ

「うわわっ」

蔓がいきなり燃えた。

「ほら、君たちも早く避難しなさい」

どうやら先生の術のようだ。

「先生、来るのが遅いッス」

「ほらほら、早く」

「ウッス。ほら、小雪行くぞ」

「う、うん」

こうしているうちにも蔓が一本また一本と飛び出してくる。

俺たちは足早に講堂を後にした。

「ところでさ……」

俺たちは今となっては危険な校舎を抜け出すため、走っていた。

所々、校舎の壁から蔓が飛び出していてそれらが時々襲ってくる。

だが、今は落ち着いてきた小雪が手伝ってくれるのでそこまで苦にならない。

「今更なんだけど、千猫南瓜ってどんな奴なんだ？」

「エー！ 千猫南瓜も知らないの!？」

俺は身近にいる妖怪は人一倍詳しいつもりだが、その他の妖怪はまったくといっていいほど知らない。

たとえ、どんなに有名な妖怪でも興味がない。会わなければ知っていても意味がないからな。

「千猫南瓜は千匹の猫が死んだ地に生えた南瓜が妖怪化した妖怪で、

妖怪の中で最凶といわれているの。本体を倒さなければ蔓はいくらでも出てくるし、本体も見つけにくいんだ」
ふむ、ってことは……

「千匹猫が死んでいそうなところを探せばいいってことか」

「それがわからないから困っているんだけど」

うーん、聞いたことがあるような気がするんだけどな。

「もう、そろそろだね」

「そうだ！」

あそこだ。あそこに違いない。

「な、何？ いきなり」

「わかったぞ！ 猫がいつぱい死んでいるところ！」

俺たちはいつの間にか校門のところに来ていた。

「どこ？」

「教えたからお前ついてくるだろ？ お前は気をつけてうちに帰れ」

「えー！」

「じゃあな」

とって俺は校内に入ってしまった。

我等が妖英学園はかなり広い。

妖怪の生息していそうな環境を作るためだ。

俺が今向かっている、裏山もそのうちの一つだ。

そこには猫又多いる。猫又は永く生きている猫が妖怪化した妖怪だ。その猫又多く生息しているのだ。その分猫がたくさん死んでいると考えてもおかしくはないだろう。

それに……

「原因の一つは俺のせいかもしれないしな……」

裏山のふもとに着くといきなりの大歓迎。

蔓による格闘ダンスだ。

トトトトトトト

右、左と順調によけていく。

後方から来た蔓を横っ飛びによける。
チッ

何かが頬を掠める。
完璧によけたと思ったがな。

と、思ったら先ほどの蔓には何かが乗っていた。

その何かが、攻撃してきたらしい。

右のほうからの攻撃。

ヒュッ

やはり、猫又だ。同じ猫の妖怪だけに仲が良いらしい。

いつの間にか子牛ほどもある猫又が二、三匹並走している。

「ったく」

走りながら木に手を当て、電撃を瞬間的に流す。

ボフッ

次々に木に手を当てていく。

ボフッ、ボフボフボフボフッ

瞬間的に電撃を流すことにより手を当てた部分だけが焦げ、木が倒れていく。

ぎゃー、にゃー

ふう、少しは効いてくれたかな？

と思っていると、地面に影が映った。

「チィ、囲まれたか」

前に三体の猫又が降り立った。

俺も足を止める。

にゃー、にゃー

四方から猫の大合唱が聞こえる。

「まさに四面楚歌、だな」

ボワア

ぎゃーにゃー

後ろから突然火の手が上がった。

「なんだ？ 新手か！？」

「まったく、この程度でてこずっているのか？」

炎の中から現れたのは…

「久々の登場なのに第一声がそれか？ 宗慈」

「うるせえ、小雪さんから話は聞いています。さっさと千猫南瓜探して来い」

「うわ、なんかキモい。どんなべたな展開だよ。」

「黙れ！ だつたら帰るぞ！」

「わったよ。まったく人の心読んでんじゃねえ。かぎカツコ外は心の声だぞ」

俺は走り出した。

「前の奴だけ片付けといてやる」

タン

俺は飛んだ、そして猫又の上で一回転。

回転の途中で手のひらを猫又に向ける。

バリバリバリっ

黒焦げにした猫又を背に俺は走り去った。

宗慈が引き付けているせいか、猫又の数も少なくなつた。
頭の上が開ける。

「……………着いた」

「にゃー、にゃー、にゃー」

頂上だ。

そこには相当な数の猫又が集まっていた。

そして……………

「あれが、千猫南瓜……………」

その猫又たちの中心には俺の背丈の5倍はある南瓜、猫の顔つきの。その顔は俺の見覚えのある特徴のある模様の猫の顔。

「この学園の中なら南瓜と一緒に埋めても大丈夫だと思っていたんだけどな」

俺がまだこの学園に入学したばかりだったころ、俺は猫を飼っていた。

かぼちゃがとても大好きだったからカボチャと名付けた。

そのころ、俺は幼かったからいちいちかぼちゃを買ってお金がなかった。

だから、その日も山にカボチャと取りに行っていた。

かぼちゃを取っているとカボチャの鳴き声が後ろで聞こえた。

振り返ると必死に妖怪に立ち向かっていくカボチャがいた。

カボチャは死んだ。

妖怪があきらめるまで何度も何度も噛み付いて、引っこ抜いて俺を守ってくれた。

そして、かぼちゃといっしょにカボチャを学校の山に埋めた。

「飼い猫の落とし前は飼い主がつけなきゃ、な」
パキパキ

指の関節を鳴らして気合を入れる。

「さあてと、俺様のお仕置きの時間だぜ！」

俺は走り出す。

猫又が俺の前に立ち塞がった。

「邪魔アすんな！」

猫又たちの横をすり抜けていく。

バリバリバリ

俺の後ろにいた猫又がすべて黒焦げになる。

同じ要領でどんどん今は千猫南瓜となってしまったカボチャに近づいていく。

当然俺も無傷ではないが俺は倒れない。

とうとう、前に猫又はいなくなった。

「覚悟しろ」

俺はそうつぶやいた。

右に左に前、後ろ。

四方八方から蔓が襲い掛かってくる。

タン、ズガガガガ

俺は空中に逃げた。

ドババババ

下から新たな蔓が伸びて来た。

「ヤバ」

空中だとかわすることができない。

ここは……

「おりゃ」

伸びてきた蔓に手のひらを向ける。

電撃が飛んだ。

無事着陸。

「あぶねえ」

また走り出す。

左右から蔓が襲う。

それを見て俺はスピードを上げた。

蔓がアーチように地面に突き刺さる。

どうやら俺に攻撃したのではないようだ。

すると、突然前からふたまわりほど大きい蔓が襲ってきた。

上下左右、蔓にふさがれていてよけられない。

「やつべ……」

ズガガガガガ

俺は蔓のアーチから放り出された。

「ぐふっ」

あー、くらった、くらった。

……死ぬかも。

「ったくよお。反抗期か？ 飼い主にこんなに暴力振るうなんて」

ふらふらしながらも立ち上がった。

「お仕置き倍だな」

ズガガガガ

「話の途中に攻撃するなんぞ、タブーだぞ」

俺はよけつつ蔓の上に飛び乗る。

次々と攻撃して来た蔓に飛び移りながら、距離を縮めていった。

ついに、千猫南瓜の上に飛び移った。

「助けた命にやられるなんてなかなか皮肉モンだな」

バチチチチ

腕に電撃を集める。

「恩を仇で返して悪かった。次、この世に出てくるときは傷つける

ほうじゃなくて、最初のカボチャみたいに護るほうでな。」

腕にすべての力を電撃に変えて、集めきった。

知らないうちに頬には、一粒の涙が流れていた。

「じゃあな、カボチャ」

バチチチシチチシチチイ

カボチャの体が一瞬光り輝いた。

ポフッ

俺は灰の上に立っていた。

ポタポタポタ

涙が頬を濡らしていく。

「俺にもまだ流す涙が残っていたとはな」

涙が足元の灰も湿らせる。

ポツポツポツ、ザザー

俺の心を表すように、俺の涙を隠すように、雨が降る。

「俺はこの雨に誓う。俺は護る。このさきずっと……」

ドサッ

俺は力尽きた。

降る雨はカボチャのぬくもりのような温かい雨だった。

倒れている人の横に黒服の男が立っていた。

「千猫南瓜も倒されたか。情が出て倒せないかと思っただが」

雨に流されていく灰を見ながら男はつぶやいた。

「教員としてもぐりこんでやったことといえば妖怪弱符の札を剥がして、南瓜に妖力を注ぎ込んだだけか」

空を見上げ、遠くを見るような目をいながら言った。

「もうそろそろ、あの方の元に帰る時期かな」

男の姿がぼやけ始める。

「それでは、雷毅君。また、そのうち」

そう倒れた人につぶやき、男は消えた。

エピソードとあとがき（作者より感謝をこめて）

エピソード

その後、俺は見事に学園の卒業試験に合格。念願の妖操師となった。

近年は妖怪の出現数が格段に増え、強力な妖怪も増えた。その対抗策として、妖操師たちは数人でグループ作り始めた。後にそれは『妖操師団』とそのままの名前が付けられる。

今、俺たちは俺、小雪、宗慈の三人で妖操師団を作り、日々妖怪退治にいそしんでいる。

「ほらー、小雪！ 雷毅君たちが待っているわよ！」
下から母の怒鳴り声が聞こえる。

「はーい」

私は書く手を止め、ノートを閉じた。

「これでもう一冊終わりか。結構書いたな。雷毅の視点でこんな
の書いてるって知ったら怒るかな？」

新たなノートをカバンに詰め、玄関に向かった。

「今度のは長くなるんでしょ？ ちゃんと準備した？」

「もう子供じゃないんだから大丈夫だよ」

靴をはきながら私は答えた。

「おーい、小雪。まだか？」

「もう、いく。じゃ、お母さん行ってくるね」

カバンを背負う。

「気をつけてね」

「うん」

玄関を開ける。

「遅いぞ、小雪」

「つたく。せつかちだな」

学園にいたころよりはちょっと大人っぽくなった二人が待っていた。

「ごめん、ごめん」

素直に謝る。

「よし、それじゃあ、行くぞ」

こうして今日も私たちは妖怪を退治している。

いろんな人を護るために……

続く!?(かもしれない……)

作者による読者のための作者なあとがき

どうでしたでしょうか？

初めての作品なので未熟な点多いでしょうが楽しんでいただけたら幸いです。

今回の作品はイメージしていたのが漫画なので、小説にしてみると表しにくくなったり、

擬音語が多くなってしまいました。

さらに、主人公の視点で書いてしまったので脇役の名前はおろか、主人公の名前もあまり出てきません。

最後まで主人公の名前を覚えていてくださった方は、そんなにいいでしょう。

(作者も黒服の男の台詞で主人公の名前を使うため、前のほうを読み返してしまいました)

もっとも、主人公の視点でもうまく書けるのですが、そこは作者の技術不足です。すみません。

さて、本編のほうでは続くかもしれないというようなことを書きま

したが、今のところは未定です。

できれば続編を書きたいと思います。

思っているだけです。確定ではありません

タイトルも主人公も今のままかどうかはわかりません。

ただ、主人公としてでも脇役としてでも、雷毅、小雪、宗慈の三人は確実に出します。

お約束します。

続編を出したときには、紹介のところでも今作の続編と載せるなどして、続編である意を示したいと思います。

ただ、何度も言うようですが確定ではありません。

期待せずに、気長に待ってやってください。

この作品を読んでくれた読者に感謝をこめて

甲崎雄人

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6839c/>

妖操師!!!

2010年10月10日03時03分発行